

Eureka XII

六年制通信 No.32 令和6年12月23日(月)号

今年も「除日起講」をお忘れなく

中一生の諸君は知らないでしょうから、と言っているとこの季節は毎回同じことを書くこととなりますが、大事な言葉だと思うので書きます。Truth stands repetition.

(真実は繰り返しに耐える)ですからね。「除日起講」は江戸時代初期の儒学者林羅山の言葉で「じょじつにこうをおこす」と読みます。「除日」は大晦日のこと、「起講」は講義を始めるという意味です。ある年の年末、羅山のもとに若者が訪ねてきて言います。先生の弟子にさせていただきたいので年が明けたら講義に参加させてほしいと。要するに大晦日に訪ねてきて、明日からよろしくお願ひしますというわけ。しかし、それを聞いた羅山は、明日まで待つ必要はない、今から勉強すればいいと言います。私も、何となく年が明けて気分を新たに勉強したいという若者の気持ちもわからなくはないのですが、羅山は答えます。なぜ明日まで待たなくてはならないのか、学問がしたいなら今から始めればいいと、反論の余地なし実に正しい言葉を若者に投げかけます。立派な先生ですね。というわけで、六年制の諸君はみなこの言葉を忘れないでほしい。今年の大晦日も、私は朝6時に机に向かいます。君たちはもう少し遅くでもいいから朝食前に机に向かいなさい。もちろん正月もです。勉強は受験生だけのものではないのですからね。朝の静謐の中、本を広げて集中する時間を持ちなさい。何も一日中勉強だけをしなさいと言っているのではありません。勉強しない日を作らないこと、どうせなら一日を勉強から始めなさいと言っているのです。

これももう何回となく書きましたが、君たちが卒業後も共通して口にできる言葉、同窓会をしたら懐かしくみんなが思い出せる言葉、そういう言葉をたくさん知ってほしいのです、在学中にね。「除日起講」や「学問の大禁忌は作輟なり」、あるいは「行くに徑に由らず(ゆくにこみちによらず)」などは是非その中に入れてほしい言葉です。何ならいづれ君たちの子どもにも伝えてほしいくらいです。

もう何百回も言ったように思いますが、今の時代は何でもすぐに検索できるのだから暗記する必要はないという考えは間違っています。いつでも頭から取り出せることが大切なのです。「人は生きていくためにパンよりも物語を必要とする時がある」も私の好きな言葉ですが、物語とまではいかなくても諺であったり聖書や論語の一節であったり、短い言葉に励まされることはよくあります。つらく苦しい時、何か判断に迷うような時、語り継がれてきた数々の言葉には昔の知恵が入っているので、それらにすがることがあります。言葉は人を傷つけますが、人は言葉に生かされることもよくあるのです。たくさん覚えて心を強く豊かにしましょうね。

冬休みのおすすめ

- ・アポロドーロス 『ギリシア神話』 (岩波文庫)

これ、訳者が語学の神様と呼ばれたお方、高津春繁先生です。大学生になる前にこの本と、せめて『イリアス』と『古事記』だけは読んでおいてほしいですね。これらは「物語の海」の源泉とっていいでしょうから。

- ・遠藤周作 『沈黙』 (新潮文庫)

前にも紹介していますが、再読に耐える本だと思います。私は高校生の頃に読んで感動して以来、何度も読み返しています。小説の最後にある、遠藤さんが最も書きたかったイエスの言葉に私は共感しつつ、必然的に『深い河』へとつながっていく思想の萌芽を強く感じます。『母なるもの』もおすすめです。

- ・星 新一 『人民は弱し官吏は強し』 (新潮文庫)

星はショートショートの大家ですが、私はこの本が大好きです。先日、用があつて東京の霞が関、つまり官庁街に行ってきましたが、あのビル群は本当に権力の象徴にしか見えませんでしたね。松阪に帰ってきてホッとしました。

- ・知念実希人 『サーペントの凱旋』 (角川書店)

これ、『となりのナースエイド』の続編です。今回は登場人物の人間模様よりも医療系の話が多かったかな。竜崎と漣も元気で何より。さて、知念さんで私の大好きなのはいわゆる死神三部作、『優しい死神の飼い方』、『黒猫の小夜曲』、『死神と天使の円舞曲』です。この順番でお読みください。三作とも光文社文庫になっています。

- ・小林秀雄 岡潔 『人間の建設』 (新潮文庫)

稀代の評論家と天才数学者の対談です。はっきり言えば雑談なのですが、内容が濃いので同じところを何度も読み返しやっとなんか言いたいのかがわかる、そんな記述が多いですね。小林が最終章で素読教育について「丸暗記させる教育だけが、はっきりした教育です」と言っていますが、その真意は読んで確かめてください。この本を読んで面白いと思ったら小林の『考えるヒント』や岡の『春宵十話』を手にとってみるといいでしょう。『春宵十話』で岡は「種をまいて育てる。種子を選べばあとは大きくなるのを見ていればいい。大きくなる力はむしろ種子が持っている」という意味のことを書いています。教育に照らしてみても、考えさせられる言葉です。

- ・ゴーゴリ 『外套・鼻』 (岩波文庫)

薄いのですぐ読めます。読めば「ふーん、そんな話か」というくらいの物語なのですが、私の恩師がロシア文学ではゴーゴリがお好きでね。思い出すなあ。学生時代、君は『ディカーニカ近郷夜話』は読んだかねと聞かれて、いいえ読んでいません(本当は書名も知らなかったけど)と答えると非常に残念なお顔をされたので、その日のうちに買いに走り読んだのを覚えています。それで、正直な感想を言えば全く引き込まれなかったのですね、当時の私は。先生に見えている光景が私には見えないと知って、ずいぶん落ち込んだものでした。今読み返すとそれなりに面白くはなっていますが、『ディカーニカ近郷夜話』はもう絶版のようですね。青空文庫にはあります。

BGMは 山下達郎 の クリスマス・イブ でした…。